様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２６１５００９

研究課題名（和文）デザイン思考をあらわす言語概念ーその形成過程と新たな展開

研究課題名（英文）Linguistic Conception as Design in Japan

研究代表者
樋口　孝之（Higuchi, Takayuki）

千葉大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：７０３７５６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：日本語語彙に存するデザイン思考や行為を表すことばについて，その概念の形成と受容の過程をあきらかにするため，design概念が導入され対訳された明治期，カタカナ語「デザイン」が確立された高度経済成長期，新領野においてデザイン活動が展開される現代，以上の時代区分においてデザイン思考や行為を表すことばの概念について調査を行った。調査結果を分析し，対象語について各時代における文脈ごとの解釈を明確にして提示した。

研究成果の概要（英文）：This study examined how semantic contents of the words that were equivalents of 'design' in Japan had been formed and accepted, verifying usages of the words appeared in discourses on arts or design. The surveys focused on the three periods that were the Meiji period, when the western concept 'design' was introduced, the high economic growth period, when the katakana word 'dezain' was established, and present day, when the usages of 'design' are expanded. Based on examinations of the survey data, we clarified semantic contents of the intended words in each context of the discourses and discovered differences and transformations of the semantic contents in each period.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：デザイン学

キーワード：デザイン　美術史　ことば　概念形成　ターミノロジー　デザイン思考

１．研究開始当初の背景

(1)「デザイン」は，今日，社会の広い活動領域で頻繁に用いられることばである。しかし，その解釈には異同がみられ，用いられる活動範囲は拡大している。

(2)デザイン学の領域では，おおむね制作の全体構想あるいはそれを生み出す行為を表すことばとして理解されている。一方，一般社会においては，制作された実体の外観を示すことばと認識される傾向が強い。製品・視覚伝達・空間環境・服飾など従来のデザイン領域における実践の現場において後者の語用は少なくない。

(3)「デザイン」は一般に英語 design を単にカタカナ表記としたものと受け止められがちである。しかし，実際には英語 design の語義の一部とそれが日本社会へ移植されるなかで発達した語義が混成されて言語概念が形成されている。明治期の工芸振興活動においては美術工芸の領域から近代デザインの萌芽に至るまで「意匠」「図案」「設計」などの日本語へ対訳されながらデザイン概念が検討されていた。

(4) カタカナ語「デザイン」は 1950 年代後半から一般社会に普及し始めたとみられている。1950 年代から 1960 年代には指導的デザイナーやデザイン研究者によってデザイン活動の意味・目的の検討，異なる領域のデザイン活動に共通する理念の模索がなされていた。

(5) 今日では，デザイン活動の領域が多様化し職能が細分化しており，諸領域のデザイン活動を共通化してとらえた議論は成立し難くなっている。そして新たに，物質，空間ないし視覚媒体の制作の範疇を超えて，サービス・生活行為や経験・制度などの非物質の創作まで「デザイン」概念が適用されている。これはことばの使用の観点に留まるものではなく，デザイナーの活動領域の拡大に関わる検討課題ともなっている。欧米ではサービスデザインのコンサルタンシー業務が重要な経済活動として認識されるとともに，デザイン教育研究機関において新しくサービスデザイン教育研究が推進され始めている。

(6)上記したデザイン活動の多様化・拡大化にしたがうデザイン概念の解釈の複雑化にともない，デザイン思考や行為を表すことばの再確認を行おうとする国際的な議論が高まってきている。日本語に関しても，デザイン思考や行為を表す言語概念の検証と整理を進めることが急務である。

２．研究の目的

日本語語彙に存するデザイン思考や行為を表すことばについて，その概念の意味構造，形成のありかた，受容のされかた，意味の変容過程をあきらかにしようとすることを目的とする。

具体的には，以下の三つの時代区分において，デザイン思考や行為を表すことばの概念について，その認知・解釈のありかたを検証し考察を進める。

(1)design 概念が導入された明治期において，どのように日本語へ対訳されたか。重要な対訳語である「意匠」「図案」について，産業振興，美術家形成の議論，美術・工芸教育に表れた語用の確認を通して，それぞれの文脈における語義とその位相を確認する。

(2) 高度経済成長期に対訳されず用いられたカタカナ語「デザイン」の語用を調査する。1950 年代から 1960 年代において，デザイン専門家が新たな社会を築く重要な活動として提議された「デザイン」概念の意味と活動目的を確認する。

(3)21 世紀に入り非物質的な事象を対象とするデザイン活動が増大している状況において，新しい領域におけるデザイン概念がどのようにとらえられているか検証を行う。欧米ならびに国内の実践例や研究事例から，それらの活動概念を抽出し整理を行う。

これらの分析結果をふまえて，デザイン思考や行為を表すことばについて，史的変遷を概括し，各時代における文脈ごとの意味内容について認知・解釈の明確化を進め，今日のデザイン思考の理解に資する指標を作成する。

３．研究の方法

本研究では，design 概念の導入と対訳（明治期），カタカナ語「デザイン」について語用の普及（高度経済成長期），新領野におけるデザイン活動の展開（現代）の三つの時代における対象語の語用と言語概念の検証を行う。

(1)明治期における美術工芸ならびに社会領域の言説から，デザイン思考や行為を表すことば，特に英語 design が対置されたことばを抽出し，ことばの意味内容と用法の差異について検証を行なう。「意匠」「図案」「設計」「計画」「雛形」などを対象に，個々の語出において文脈から意味内容を検証し，用法を比較していく。以下を資料として設定する。

①デザイン・工芸・美術に関する言説については，万国博覧会，内国勧業博覧会事業，その他美術産業振興，美術家団体活動，官立学校の美術・工芸教育，意匠条例行政など主に美術や工芸の専門領域における文献。

②社会一般の言論については，文芸書，新聞記事，各種雑誌，官報，公文書，一般的な領域における文献。

③辞書的な解釈については，各種辞書（字引，国語，漢和，英和・和英・英華）ならびに専門字彙。

(2) カタカナ語「デザイン」について，戦後期から 1960 年代における，デザイナーの活動や言動，企業内デザイン部署の設立，産業振興政策，デザイン教育機関の拡大，デザイン学会の設立，デザイン協会の活動，世界デザイン会議の開催などにみられる語用を検証する。資料として主に「工芸ニュース」を設定する。

(3)新領野のデザイン活動について，文献調査，海外のデザイン実践事例ならびに研究事例の調査を実施する。「サービスデザイン」「エクスペリエンスデザイン」「デザインアクティヴィズム」「クリエイティブマネジメント(デザイン)」などの新しいデザイン活動における実践事例，教育研究事例におけるデザインの概念を検討していく。

４．研究成果

(1)明治期におけるデザイン思考・行為に関わる言説の抽出ならびに整理，語用の検証を進めた。

平成 22 年度に，明治期の美術産業振興，美術家団体活動，官立学校の美術・工芸教育の活動に関する幅広い資料を収集し，西洋デザイン活動を受容・導入する議論を確認した。また，デザインに類する活動について，新聞記事から一般社会へ報知する言説の確認,辞書類から「意匠」「図案」「計画」などの解釈を確認した。

同じく平成 22 年度に，京都工芸繊維大学付属図書館において京都高等工藝学校時代の貴重図書を調査し,同校創立時期の教育課程や活動方針ならびに『考案鏡』『工藝應用圖案雑誌』における言説を確認した。

それらの調査から対象とする語が用いられる言説を抽出し，語用を整理した。データベースソフトをカスタマイズの行い，そこへ重要な語用例を入力し，語ごとの検索を可能とした。

抽出された言説について，西洋の近代デザイン運動から「意匠」「図案」へ対訳関係について各言論のおかれた文脈を考察し意味の相違を示唆した。「意匠」は，漢籍由来の語義，訓読みされたことにより解釈される語義，目的論の主張において用いられた語義，法令における条件つきの定義が社会一般に広まった語義などの，語用の状況と変遷があきらかになった。「図案」は，「意匠図案」という語用の出現頻度，「図案の意匠」の語用などを文脈から考察し，「意匠」を心中の創意や考案の意味合いを有することに比較して，実制作に先立って形状に表したものを示す意味合いが強いことが確認された。「図案」については本研究において収集したデータに基づき，今後，さらに精査を進める。

また，「形容」「形貌」「外容」「格好」「顔貌」「形貌彩色」「形質體状」など物体の外観の様態を示す語用，「風韻」「韻致」「潤華」など多様な漢語が外観の態様を形容・評価するため用いられていたことを確認し，このような外観の様態を表す漢語や印象について機微をうがつ漢語の利用衰退が，後世におけるカタカナ語「デザイン」の語用と語義に関連することを示唆した。

(2) 高度経済成長期については，「工芸ニュース」誌を中心に，デザイン評論，デザイン教育，デザイン行政，デザイン実践に用いられた言説の調査を行い，デザイン思考・行為に関わる提言，議論としての言説の抽出ならびに整理を進めた。

平成 22 年度ならびに平成 23 年度に，商工省工芸指導所から工業技術院産業工芸試験所で用いられた文献を継承する財団法人工芸財団において文献資料調査を行い，各種資料を確認収集した。工芸指導所ならびに工芸試験所が編集した「工芸ニュース」（一部「工芸指導」）については 1943 年から 1974 年まで発刊された 217 冊を入手し，同期間において新たなデザイン活動について提議や討議を行う言説を確認し，語用を抽出した。

平成 23 年度には，工芸財団研究会において，本研究課題に関する発表ならびに議題提供を行うとともに，戦後から今日にいたるデザイン活動の目的等の討議を行った。また，高度経済成長期にデザインを学び実践に携わったデザイン関係者をインフォーマントとして同時期のデザイン動向を確認した。

収集した資料から，対訳されずに使用されはじめたカタカナ語「デザイン」の語用を分析し，当時の文脈における同語の意味内容の検証を行った。大正期から戦前における高等工芸学校や商工省工芸指導所における「工芸」概念を脱却し新たな概念設定を模索する動きを確認し，戦後期になって「インダストリアル・アーツ」「工業設計」概念などを経て，デザイン専門家が新たに「デザイン」を標榜して活動するようになった 1950 年代から 1960 年代において「デザイン」概念に込められた活動目的を確認した。

(3)新領野におけるデザイン活動の展開については，「サービスデザイン」「エクスペリエンスデザイン」「デザインアクティヴィズム」「ソーシャルデザイン」などの海外における議論と活動実践例について調査を実施した。

平成 23 年度には，「デザインアクティヴィズム」について同語をテーマとして実施された国際研究集会（バルセロナ・スペイン）において，同集会で報告された実践例ならびにについて調査した。同集会の議論を確認するとともに，同テーマを設定したヴィクトリア・アルバート美術館（英国）の G.Julier 博士，同概念について単著を表したアールト大学（フィンランド）の A.Fuad-luke 教授に

インタビューを行った。
　同調査とは別に平成 23 年度にはパーソンズ・ニュースクール大学（米国）M. Mitrasinovic 教授,グラスゴー美術大学（連合王国）G.Hush 博士，アールト大学（フィンランド）P.Korvenmaa 教授との討議の機会を得た。パーソンズ・デザインストラテジー学部における BOP, ProBono，公共サービス改良などに向けたデザインアプローチ, G.Hush 博士の社会学を背景とした社会調査とデザイン実践の連携活動について確認した。
　平成 24 年度には,「ソーシャルデザイン」「サービスデザイン」について連合王国ならびにポルトガルで調査を実施した。ロンドンイースト大学 C.Harper 博士には英国におけるデザイン活動展開の概況，デザインコンサルタンシーSTBY（英国）G.Van Dijk 氏にサービスデザイン実践事例，ケンブリッジ大学, J.Mourtrie 博士へデザインマネジメント教育研究，王立芸術大学院大学（英国）A. Hall 教授，S. Torrisi 講師へ Innovative Design Engineering 教育研究，POLICY CONNECT（英国）J.Baily 研究員，T. Kohut 研究員へ政策シンクタンクにおける Design & Innovation 研究と社会政策としてのデザイン提言の状況, IADE クリエイティブ大学(ポルトガル), E.Corte-Real 教授，A.Mateus 教授へ同国の社会経済状況下，中小製造業やローカル組織におけるサービスデザインのアプローチ，以上インタビュー調査を通して新たなデザイン活動の状況，各活動において設定されるデザイン概念ならびにデザイン思考と実践に向けた資質の確認を行った。

(4)それぞれの調査結果を通して考究し，広く浸透しつつある「サービスデザイン」「ソーシャルデザイン」については，デザイン教育およびデザイン実践における同概念の提唱を確認し用法を検証した。それらの教育と実践において，Co-design 手法の展開が広く進められていることを確認し，デザインの主体者やデザイナーの役割について検討を行った。
　また，従来の工学領域におけるイノベーション創発に向けた「デザイン思考」教育について行われている議論の確認を行った。
　これらの調査と分析を通して，工業に関わる用法，生活提案や社会改良に関わる用法，技術やシステムの革新に関わる用法として「デザイン」の意味内容の変容と対象を拡大する状況が示された。

(5) 上記調査を通して幅広い調査資料を収集することができ，引き続き資料を整理して体系化し，論文発表を行う。また，史的資料の分析結果については言説データとして公開する準備を進めている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）
①<u>樋口 孝之</u>, Social and Service Design,「アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築」2012 年度研究会, 2012 年 11 月 4 日, 国際高等研究所
②<u>樋口 孝之</u>，デザイン思考をあらわす言語概念について，第 7 回工芸財団研究会，2011 年 9 月 3 日，工芸財団

６．研究組織
(1)研究代表者
樋口　孝之　（Higuchi Takayuki）
千葉大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：70375608